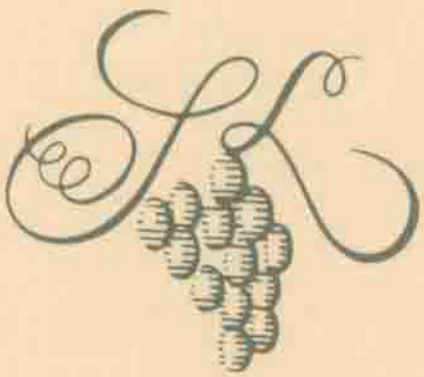
新潮文庫

蟹工船・党生活者

小林多喜二著



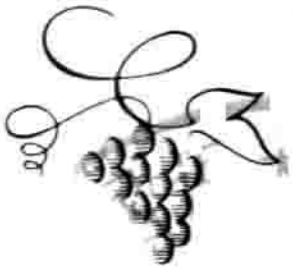
新潮社

需要全本请访问 www.ertongbook.com

新潮文庫

蟹工船・党生活者

小林多喜二著



新潮社版

547

蟹工船・党生活者

新潮文庫　こ-2-1



昭和二十八年六月二十八日　発行
平成十五年六月二十五日　九十一刷改版
平成二十年六月十五日　百一刷

著者　小林多喜二
発行者　佐藤隆信
発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二―八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部(〇三)三二六六―五四四〇
　　読者係(〇三)三二六六―五一一一
http://www.shinchosha.co.jp

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社　製本・錦明印刷株式会社
Printed in Japan

ISBN978-4-10-108401-5 C0193

目次

蟹工船……七
党生活者……一四一
解説　蔵原惟人

新潮文庫

蟹工船・党生活者

小林多喜二著



新潮社版

547

需要全本请访问 www.ertongbook.com

目次

蟹工船……七
党生活者……一四一
解説　蔵原惟人

蟹工船・党生活者

蟹工船（かにこうせん）

需要全本请访问 www.ertongbook.com

一

「おい、地獄さ行ぐんだで！」

二人はデッキの手すりに寄りかゝって、蝸牛が背のびをしたように延びて、海を抱え込んでいる函館の街を見ていた。――漁夫は指元まで吸いつくした煙草を唾と一緒に捨てた。巻煙草はおどけたように、色々にひっくりかえって、高い船腹をすれ〳〵に落ちて行った。彼は身体一杯酒臭かった。

赤い太鼓腹を巾広く浮かばしている汽船や、積荷最中らしく海の中から片袖をグイと引張られてでもいるように、思いッ切り片側に傾いているのや、黄色い、太い煙突、大きな鈴のようなヴイ、南京虫のように船と船の間をせわしく縫っているランチ、寒々とざわめいている油煙やパン屑や腐った果物の浮いている何か特別な織物のような波……。風の工合で煙が波とすれ〳〵になびいて、ムッとする石炭の匂いを送った。ウインチのガラ〳〵という音が、時々波を伝って直接に響いてきた。

この蟹工船博光丸のすぐ手前に、ペンキの剝げた帆船が、へさきの牛の鼻穴のようなところから、錨の鎖を下していた。甲板を、マドロス・パイプをくわえた外人が二人同じところを何度も機械人形のように、行ったり来たりしているのが見えた。ロシアの船らしかった。たしかに日本の「蟹工船」に対する監視船だった。

「俺らもう一文も無え。——糞。こら。」

そう云って、身体をずらして寄こした。そしてもう一人の漁夫の手を握って、自分の腰のところへ持って行った。袢天の下のコールテンのズボンのポケットに押しあてた。何か小さい箱らしかった。

一人は黙って、その漁夫の顔をみた。

「ヒヒヒヒ……」と笑って、「花札よ。」と云った。

ボート・デッキで、「将軍」のような恰好をした船長が、ブラ〳〵しながら煙草をのんでいる。はき出す煙が鼻先からすぐ急角度に折れて、ちぎれ飛んだ。底に木を打った草履をひきずッて、食物バケツをさげた船員が急がしく「おもて」の船室を出入した。——用意はすっかり出来て、もう出るにいゝばかりになっていた。

雑夫のいるハッチを上から覗きこむと、薄暗い船底の棚に、巣から顔だけピョコ〳〵出す鳥のように、騒ぎ廻っているのが見えた。皆十四、五の少年ばかりだった。

「お前は何処(どこ)だ。」

「××町。」みんな同じだった。函館の貧民窟(ひんみんくつ)の子供ばかりだった。そういうのは、それだけで一かたまりをなしていた。

「あっちの棚は？」

「南部。」

「それは？」

「秋田。」

それ等は各々(おのおの)棚をちがえていた。

「秋田の何処だ。」

膿(うみ)のような鼻をたらした、眼のふちがあかべをしたようにたゞれているのが、

「北秋田だんし。」と云った。

「百姓か？」

「そんだし。」

空気がムンとして、何か果物でも腐ったすッぱい臭気がしていた。漬物を何十樽(たる)も蔵(しま)ってある室(へや)が、すぐ隣りだったので、「糞」のような臭(にお)いも交っていた。

「こんだ親父(おど)抱いて寝てやるど。」——漁夫がベラ〳〵笑った。

薄暗い隅の方で、袢天を着、股引をはいた、風呂敷を三角にかぶった女出面らしい母親が、林檎の皮をむいて、棚に腹ん這いになっている子供に食わしてやっていた。子供の食うのを見ながら、自分では剝いだぐる〳〵の輪になった皮を食っている。何かしゃべったり、子供のそばの小さい風呂敷包みを何度も解いたり、直してやっていた。そういうのが七、八人もいた。誰も送って来てくれるもの、いない内地から来た子供達は、時々そっちの方をぬすみ見るように、見ていた。

髪や身体がセメントの粉まみれになっている女が、キャラメルの箱から二粒位ずつ、その附近の子供達に分けてやりながら、

「うちの健吉と仲よく働いてやってけれよ、な。」と云っていた。木の根のように不恰好に大きいザラ〳〵した手だった。

子供に鼻をかんでやっているのや、手拭で顔をふいてやっているのや、ボソ〳〵何か云っているのや、あった。

「お前さんどこの子供は、身体はえゝべものな。」

母親同志だった。

「ん、まあ。」

「俺どこのア、とても弱いんだ。どうすべかッて思うんだども、何んしろ……。」

「それア何処でも、ね。」

――二人の漁夫がハッチから甲板へ顔を出すと、ホッとした。不機嫌に、急にだまり合ったまゝ、雑夫の穴より、もっと船首の、梯形（ていけい）の自分達の「巣」に帰った。錨を上げたり、下したりする度に、コンクリート・ミキサの中に投げ込まれたように、皆は跳ね上り、ぶッつかり合わなければならなかった。

薄暗い中で、漁夫は豚のようにゴロ〳〵していた。それに豚小屋そっくりの、胸がすぐゲエと来そうな臭いがしていた。

「臭せえ、臭せえ。」

「そよ、俺だちだもの。え、加減、こったら腐りかけた臭いでもすべよ。」

赤い臼（うす）のような頭をした漁夫が、一升瓶そのまゝで、酒を端のかけた茶碗（ちゃわん）に注（つ）いで、鯣（するめ）をムシャ〳〵やりながら飲んでいた。その横に仰向けにひっくり返って、林檎を食いながら、表紙のボロ〳〵した講談雑誌を見ているのがいた。

四人輪になって飲んでいたのに、まだ飲み足りなかった一人が割り込んで行った。

「……んだべよ。四ヵ月も海の上だ。もう、これんかやれねべと思って……。」

頑丈な身体をしたのが、そう云って、厚い下唇を時々癖のように嘗（な）めながら眼を細めた。

「んで、財布これさ。」

干柿のようなべったりした薄い蟇口を眼の高さに振ってみせた。

「あの白首、身体こったらに小せえくせに、とても上手えがったどオ！」

「オイ、止せ、止せ！」

「え、え、やれ〳〵。」

相手はへ、、、、と笑った。

「見れ、ほら、感心なもんだ。ん？」酔った眼を丁度向い側の棚の下にすえて、顎で、

「ん！」と一人が云った。

漁夫がその女房に金を渡しているところだった。

「見れ、見れ、なア！」

小さい箱の上に、皺くちゃになった札や銀貨を並べて、二人でそれを数えていた。

男は小さい手帖に鉛筆をなめ、なめ何か書いていた。

「見れ。ん！」

「俺にだって嬶や子供はいるんだで。」白首のことを話した漁夫が急に怒ったように云った。

そこから少し離れた棚に、宿酔の青ぶくれにムクンだ顔をした、頭の前だけを長く

需要全本请访问 www.ertongbook.com